

初級後期・日本語学習者の「助詞」に関する理解と定着度 ——中間テストにおける解答行動を手懸りに——

森 康眞

1. はじめに一学習者から見た助詞の視点

第二言語又は外国語として日本語を学ぶ外国人学習者にとって、「助詞」は習得・学習が難しい文法項目の一つと言われている。その難しいとされる要因には、助詞の種類の多岐性と各用法に見られる多義性や用法面での重複・類似性にあると思われる。日本語を母語に持たない学習者が話したり書いたりする言語活動の産出場で、助詞の使い方に誤用・回避・非用（迫田 2002：26）が見られるのは極めて日常的な場面となっている。日本語を教えている側から見れば、学習者に助詞の正確な文法知識と適確な言語運用を図るための指導や訂正方法に関心が集中してしまいがちであるが、学習者の学習過程における理解（分かる）と定着（使える）の進行状況を含めた視点を持つことで、学習上の困難点や問題点等に対する手懸りが得られるとともに、それらに対する方策的アプローチを創出することも可能になると思われる。他方、学習者側から見れば、助詞の学習が膠着語である日本語としての文の構造を理解する上で必要不可欠であることを認識しつつも、助詞の使い方が文の意味・意図の解釈に相違を生じさせたり、意思伝達行動上の文脈の誤解を生むことになりかねない懸念を抱いていると思われる。

本稿は、以上の諸点を踏まえて、筆者がスリーパトゥム（Sripatum）大学で教えている初級後期レベルにあるタイ人大学生（以下、学習者）の助詞についての文法的理解度と文法的知識の活用・定着度を考察し、論述するものである。考察に際しては、言語能力の測定を目的とする言語テストの一つである学力テストにおける助詞に関わる出題部分の解答行動を対象とし、解答行動における正答・誤答（含無答）の傾向を記述的に分析した上で、誤答分析を行った。誤答分析は、対照言語学や第二言語習得理論の観点に立つ誤用分析の手法に基づいて、正答・誤答の因果関係並びに誤答の原因や背景をできる限り多角的に解明することに主眼を置いた。尚、学力テストには到達度テストとしての役割を有する中間テストを使用した（石田 1996：216-217）。

2. 中間テストにおける助詞の出題部分について一出題の概要

2.1 学習者の日本語レベル

中間テストを受験した学習者は、2007（仏暦 2550）年度・後期に開講された「JPN424：仕事のための日本語（Japanese for Careers）」を履修した 57 名である。同科目を履修した学習者の日本語レベルは、初級日本語の 80%程度の内容を修了している初級後期に該当する。

2.2 助詞の出題形式・方法

中間テストの助詞に関わる出題形式は、空所補充（穴埋め）方式（再生方式）で、適切な助詞を一つ書き入れる方法である。研究上の資料収集の方法論からは、文法規則操作法と言われるものである（迫田 2002：151）。12 の設問文と 24 項目から構成される。尚、出題の指示文には、「は」「も」（係助詞）を入れないという但し書きがしてある。

2.3 出題内容

出題した内容は、授業の中で聴解の練習問題として再教材化の上、使用した วิวรรณ วิจิตรติกง・Sachiko Ogasawara (1998) 『ภาษาญี่ปุ่นอย่างง่าย ชุดเดินเที่ยวกับคนญี่ปุ่น やさしい日本語 日本人をタイに迎えて（泰日経済技術振興協会付属語学学校）』から抜粋した本文会話である（46、54、62 の各頁）。学習者には聴解スクリプトに代わるタスクシートが与えられている。使用されるべき助詞は「の」「に」「が」「で」「を」「と」の六つである。尚、助詞の名称・類別方法には研究者間で諸説分かれるが、本稿では、助詞の個別的機能を重視するべく、便宜上、連体助詞・準体（言）助詞・並列（並立）助詞・格助詞という通称を用いる（高見澤 1997：101-103）。

表 1 助詞の出題内容及び正解

問題. () に助詞を書いてください。「は」「も」を書かないでください。 ●日本人 (1.の) 口 (2.に) 合います。 ●私は辛い (3.の) (4.が) 好きです。 ●このたれ (5.に) は とうがらし (6.が) 入っています。 ●タイ (7.で) は 男 (8.の) 人は みんなしゅっけするんですね。 ●本堂 (9.に) 入りましょう。 ●ラーマおうじはさる (10.に) 手伝ってもらって、さいご (11.に) おくさん (12.を) 取り返すこと (13.が) できたんです。 ●トックトックって、あの三りん (14.の) じどうしゃ (15.の) ことですか。 ●私はおなか (16.が) いっぱいです。 ●みんな お坊さん (17.に) 何 (18.を) あげているんですか。 ●それは まおう (19.と) さる (20.の) たたかい (21.の) えです。 ●このぶつぞうは ひすい (22.で) できています。 ●あそこ (23.に) お坊さん (24.が) います。
--

3. 採点された得点結果—学習者別・項目別正答率を中心に

全項目数は 24 個である。従って、学習者の正答項目数を数える素点を得点と見做す。以下、基本統計量（Microsoft Office Excel 使用）を用いて概観する（表 2）。

3.1 学習者の得点から見た全体的傾向

基本統計量で見ると、得点の総和を全学習者 57 名で割った平均値は 13.4 点で、55.8%の正解率である。得点順に並べた学習者の半数に該当する中央値も 13 点で、7 名の最多学習者が見られる最頻値も 13 点である。数値は何れも代表値で、得点分布の中心傾向を示す値である。得点の分布状況に関しては、平均値からのばらつき度（個人差の度合）を示す標準偏差が 5.7 で、得点が平均値周辺に集中している程度を示す尖度が -0.5、平均値を中心にした左右対称性を表す歪度が -0.1 であるから、正規分布に比して緩やかな傾斜曲線で、左側（負）の裾野が長い方向を

帯びている特徴を示している。

表 2 学習者の正答数・正答率・人数

正答数 (個)	正答率 (%)	人数 (名)	比率 (%)	19	79.1	1	1.8	12	50.0	6	10.5	5	20.8	1	1.8
				18	75.0	6	10.5	11	45.8	3	5.2	3	12.5	2	3.5
23	95.8	2	3.5	16	66.7	1	1.8	10	41.7	4	7.0	2	8.3	1	1.8
22	91.7	3	5.2	15	62.5	2	3.5	9	37.5	1	1.8	0	0.0	1	1.8
21	87.5	4	7.0	14	58.3	3	5.2	8	33.3	6	10.5	総計		57	100
20	83.3	2	3.5	13	54.2	7	12.3	7	29.2	1	1.8				

※百分率は小数点第 2 位を四捨五入した数値である（以下、同様）。

学習者全員を上位・中位・下位の三群に区分すると、上位群となる 75～100%の正答率（18～24 点）の学習者は 18 名で、全体の 31.6%を占め、中位群となる 45.8～70.8%の正答率（11～17 点）の学習者は 22 名で、38.6%を占め、下位群となる 0～41.7%の正答率（0～10 点）の学習者は 17 名で、29.8%を占め、中・上・下の階層構造となる。通常、上位と下位をそれぞれ全体の 27%（15 名）とし、中位を 46%（27 名）とするが、人数が重複するため、上記のような群別となった。学習者の得点の正答率を見る限りでは、全体として得点分布が散在するものの、平均 55.8%の到達度で、高い到達状況とは決して言えないが、学習者にとって助詞の使い方が如何に難しいかを反映する、或いは、如何に容易でないかを実感している証左と受け止めたい。

3.2 項目別に見た全体的傾向

24 個の各項目の正答率を軸に項目全体の正答傾向を俯瞰する（表 3）。

表 3 項目別の正答・正答数・正答率・誤答率

項目	正答	正答数	正答率 (%)	誤答率 (%)	8	の	44	77.2	22.8	17	に	33	57.9	42.1
					9	に	33	57.9	42.1	18	を	30	52.6	47.4
1	の	47	82.5	17.5	10	に	24	42.1	57.9	19	と	24	42.1	57.9
2	に	45	78.9	21.1	11	に	21	36.8	63.2	20	の	39	68.4	31.6
3	の	38	66.7	33.3	12	を	20	35.1	64.9	21	の	27	47.4	52.6
4	が	39	68.4	31.6	13	が	20	35.1	64.9	22	で	27	47.4	52.6
5	に	34	59.6	40.4	14	の	38	66.7	33.3	23	に	37	64.9	35.1
6	が	24	42.1	57.9	15	の	34	59.6	40.4	24	が	29	50.9	49.1
7	で	27	47.4	52.6	16	が	30	52.6	47.4					

約 80%以上の高い正答率の項目は、項目 1（の）・項目 2（に）・項目 8（の）の 3 項目である。次に、項目正答率が約 65～69%の範囲では、項目 3（の）・項目 4（が）・項目 14（の）・項目 20（の）・項目 23（に）の 5 項目が指摘できる。更に、項目正答率が約 58～60%の約 6 割となると、項目 5（に）・項目 9（に）・項目 15（の）・項目 17（に）の 4 項目が挙げられる。項目正答率が 50%を僅かに上回っているのは、項目 16（が）・項目 18（を）・項目 24（が）の 3 項目である。その逆に、項目正答率が 50%を下回った項目は、全部で 9 項目となっている。その内、47%台では、項目 7（で）・項目 21（の）・項目 22（で）の 3 項目が、40%台では、項目 6（が）・項目 10（に）・項目 19（と）の 3 項目がそれぞれ挙げられる。40%未満の最も低い項目正答率は、項目

11 (に)・項目 12 (を)・項目 13 (が) の 3 項目である。

3.3 助詞別に見た個別的傾向

ここでは、項目別の各正答率の全体的傾向と併せて、各項目の正答傾向を助詞別に概観することによって、個別的傾向の概略を記述する。

項目正答率が高い助詞は「の」「に」の二つだけである。「の」は全部で 7 項目設題されているが、項目 21 の一つを除いて、項目 1・3・8・14・15・20 の 6 項目とも約 60%以上の正答率を示している。用法から見ると、項目 3 のみが「準体助詞」で、残りは名詞修飾の働きをする「連体助詞」である。項目 21 の「の」が相対的に最も低い正答率を示している要因は、1 文中に三つの助詞を入れる設題形式で、且つ、名詞修飾が連続する言語形式に因るものと思われる。項目 15 も同類で、項目 21 に次ぐ項目正答率の低さとなっている。助詞「に」に関しても「の」と同様に、全部で 7 項目設題されているが、「の」と異なる点は、項目 5・9 の 2 項目が同じ用法とされるのに対して、他の 5 項目は別々の用法となっていることである。項目 5・9 の正答率は約 60%で、1 文中に四つの助詞を入れる形式である項目 10・11 を除いた項目 2・17・23 の 3 項目の正答率は約 60～80%の範囲にある。助詞の用法上、一義的な「の」と多義的な「に」の正答率が相対的に高かったのは、出題固有の特性があるにせよ、解答の導きやすい助詞だと推論される。

他方、30～60%台の段階的な正答率を示しているのが助詞の「が」である。助詞「が」は 5 項目あるが、その内、項目 4・16 及び項目 6・24 が同一用法なので、異なる用法は三つとなる。「が」については、項目 4・16 の平均正答率が 60.5%で、項目 6・24 の平均正答率が 46.5%で、項目 13 の正答率が 35.1%となっているが、集約的に見れば、約 40～60%の範囲に止まっていると言える。2 項目ずつ設題されている助詞は「で」と「を」の二つである。前者の「で」は、それぞれ違う用法となっているが、項目 7・22 と同率の 47.4%で、約 5 割の正答率を示している。後者の「を」は、同じ用法であるが、項目 18 の正答率が 52.6%なのに対して、項目 12 の正答率は 35.1%となっている。項目 12 の正答率が極端に低いのは、1 文中に四つの助詞を入れる形式の設題である。1 項目のみの項目 19 の助詞は「と」で、正答率は約 4 割の 42.1%である。

何れにせよ、各助詞の設問項目数や用法の設問項目数に異なりが見られるものの、項目正答率を軸とする各助詞の正答率を概観する限りでは、「の」全体の平均正答率が 66.9%と最も高く、その次に高かったのは、平均正答率が 56.9%を占める「に」である。以下、順に、平均正答率が 49.8%の「が」、両項目の正答率が同じ 47.4%の「で」、平均正答率が 43.9%の「を」、そして、正答率が 42.1%の「と」と続く正答順序の結果（の>に>が>で>を>と）となった。

3.4 文中の助詞の項目数と完全・不完全正答数の関係

項目別及び助詞別に概観した正答・誤答の傾向を左右させる要因の一つとして、設問文である 1 文中に入れる助詞の項目数と密接な関係があることは、3.3 で触れた。1 文単位における助詞の項目数に焦点を当てて、助詞の難易度を考える。1 文中に設題された項目が全部正答であれば、

完全正答（完答）とし、誤答が一つでも認められれば、不完全正答（不完答）と見做す。部分正答数は不完答の場合における設題に応じた正答項目数を示す（表 4）。

表 4 文中の助詞の項目数及び完全・不完全正答率

項目	完全正答（完答）率 （完全正答数）	不完全正答（不完答）率 （不完全正答数）	部分正答数			
			[3]	[2]	[1]	[0]
9	57.9% (33)	42.1% (24)	—	—	—	24
16	52.6% (30)	47.4% (27)	—	—	—	27
22	47.4% (27)	52.6% (30)	—	—	—	30
1・2	77.2% (44)	22.8% (13)	—	—	4	9
3・4	56.1% (32)	43.9% (25)	—	—	13	12
5・6	33.3% (19)	66.7% (38)	—	—	20	18
7・8	45.6% (26)	54.4% (31)	—	—	19	12
14・15	50.9% (29)	49.1% (28)	—	—	14	14
17・18	42.1% (24)	57.9% (33)	—	—	15	18
23・24	40.4% (23)	59.6% (34)	—	—	20	14
19・20・21	28.1% (16)	71.9% (41)	—	11	20	10
10・11・12・13	8.8% (5)	91.2% (52)	10	11	13	18

1 文に助詞を一つだけ入れる項目（9/16/22）は、正答・誤答のみの照応関係であるが、三つの設問文の平均正答率は 52.6% である。1 文中に助詞を二つ入れる項目（1・2/3・4/5・6/7・8/14・15/17・18/23・24）の七つの設問文は、各設問文の完答率にばらつきが見られるものの、平均完答率は 49.4% である。七文の対比数で見ると、4 対 3 の割合で不完答率の高い設問文が 1 文多くなっているが、部分正答数を総和した比数（[1]と[0]の両欄）では、1 項目のみの部分正答数の方が 2 項目とも誤答になった数よりも数量的に上回っている。更に、1 文中に三つの助詞を入れる項目（19・20・21）は 28.1% の完答率である。1 文中に四つの助詞を入れる項目（10・11・12・13）では僅か 8.8% の低い完答率で、部分正答数ゼロを示す 4 項目全て誤答になった数も 18 で最多である。これは、助詞を一つ入れるのに相当苦慮している解答状況と言える。設問項目（空欄）の前後を見渡せる範囲内の短文であれば、語や文の意味が比較的容易に把握できるのに対して、1 文中の項目が多くなる長文（単文・複文・重文）では、文節構成や文の成分に留意しながら、項目の前後にある語と語の関係や補語と述語の文法的関連性及び意味的關係を捉えることの困難性を反映しているものと思われる（市川 1988 : 166）。

4. 誤答の傾向と原因—設問文を着眼点とする誤答分析

これまでは、学習者の正答率及び項目別・助詞別の正答傾向、設問文を単位とする完答の量を計量的に分析・考察を進めてきた。以下では、設問文を着眼点に据えて、助詞の種類や助詞の各用法を参酌しながら（表 5）、誤答の傾向及びその原因や背景を個別的に分析するとともに、誤答の通積的・複眼的な考察を試みることにする。

表 5 助詞・用法別の誤答率及び誤答例（個数）

助詞	用法	項目	誤答率（数）	誤答例（数）
の	名詞修飾	1	17.5 (10)	に (9) 無 (1)
		8	22.8 (13)	に (9) が (2) で (1) 無 (1)
		14	33.3 (19)	に (9) と (4) で (2) が (2) へ (1) 無 (1)
		15	40.4 (23)	に (8) を (7) が (4) で (2) へ (1) 無 (1)
		20	31.6 (18)	に (8) が (4) を (3) と (2) 無 (1)
		21	52.6 (30)	を (15) が (6) で (4) に (3) も (1) 無 (1)
に	名詞代用	3	33.3 (19)	に (11) で (5) 無 (2) を (1)
	到達場所・着地点	5	40.4 (23)	で (14) の (6) を (1) と (1) 無 (1)
		9	42.1 (24)	を (10) の (6) が (5) で (2) 無 (1)
	存在場所	23	35.1 (20)	の (13) で (4) が (2) 無 (1)
	比較対象	2	21.1 (12)	を (5) が (3) の (2) で (1) 無 (1)
	授与者	10	57.9 (33)	の (18) が (7) を (4) と (1) で (1) は (1) 無 (1)
が	授与者	17	42.1 (24)	の (15) が (4) は (2) を (1) と (1) 無 (1)
	受益者	11	63.2 (36)	の (22) を (4) と (4) が (3) で (2) 無 (1)
	時点・順序	4	31.6 (18)	を (8) の (4) で (3) に (1) も (1) 無 (1)
		16	47.4 (27)	に (12) を (5) で (5) の (4) 無 (1)
	可能対象	13	64.9 (37)	を (16) で (8) の (6) に (5) も (1) 無 (1)
を	主格	6	57.9 (33)	に (12) を (10) の (7) で (2) 無 (2)
		24	49.1 (28)	に (9) を (6) の (6) で (4) 無 (2) へ (1)
	場所範囲	7	52.6 (30)	の (18) に (9) を (1) と (1) 無 (1)
で	材料	22	52.6 (30)	の (10) に (10) を (5) が (4) 無 (1)
を	動作対象	12	64.9 (37)	の (15) に (13) が (5) で (1) と (1) は (1) 無 (1)
		18	47.4 (27)	に (10) が (6) の (5) で (3) か (1) へ (1) 無 (1)
と	列挙	19	57.9 (33)	の (13) に (11) が (3) を (3) で (2) 無 (1)

4.1 項目 1・2

両項目とも誤答率が約 2 割と低く、「の」「に」の助詞別でもそれぞれ誤答率が最も低い結果であった。換言すれば、極めて正答率が高かった助詞である。加えて、2 項目とも正解した完答率も最多であった。「に」の助詞の用法に関しては、「比較・基準の対象」と言えるが、学習者は「対象」という理解で対応したものと思われる。同訓異字語ではあるが、「会います」では「人＋に」という形式で頻繁に出現しているので、それを類推したとも考えられる。また、「対象」という意味役割で捉えたと、誤答例の「を」が第 1 位を占めているので、「対象」という点では十分な理解があったものと思われる。しかしながら、「を」は「動作の対象」を意味役割とする格助詞である。格関係の視点からは、誤答例の 2 番目の「が」も誤使用されているので、「主格」又は「目的格」の把握上の混同もあったのではないかと推測される。

4.2 項目 3・4

両項目ともに誤答率が約 3 割で低く、両項目とも正答した完答率も約 6 割の高さであった。項目 3 の「の」は、準体助詞に種別される助詞である。「形容詞＋の」の形式で扱われている場合は「名詞の代用」である。文型的側面からは、「動詞（辞書形）＋のが好きです（体言化）」の影響を受けていることも予想される。項目 3 の誤答で目立った助詞は「に」であるが、テスト行動上の単なる当て推量の解答結果なのか否か理由が釈然としない点もある。項目 4 の「が」は「感

情の対象」であるが、「～は～が好きです」の文型の定着度の高さを示していると言える。「対象」との関連性では、依然として「を」を誤使用している学習者も見られる。

4.3 項目 5・6

項目 5 の「に」の誤答率は 4 割で低い一方で、項目 6 の「が」の誤答率は約 6 割で高いという対照的な解答である。この対照的解答は、両項目とも正答した完答率の低さにも繋がっている。約 7 割の学習者が完全正答できなかった。この約 7 割の不完答率は、1 文に二つの助詞を入れる設問文の中で一番高かった数字でもある。項目 5 の「に」は「場所格」の用法であるが、助詞の「で」との混同も多く見られる。他方、項目 6 の「が」は項目 9 の「に」との混同があったものと思われる。即ち、「入ります」という動詞の格関係の把握方法で、項目 6 に「に」を入れた学習者と項目 9 に「が」を入れた学習者である。更に、項目 6 の誤答例の中に「を」が見られることから、「が＋自動詞（入ります）」「を＋他動詞（入れます）」の自他の対立もあったのではないかと考えられる。動詞の文法的・意味的性質にもっと注意を払う必要があるように思われる。

4.4 項目 7・8

項目 7 の「で」の誤答率は約 5 割であるのに対して、項目 8 の「の」の誤答率は約 2 割である。学習者の誤答で際立つのは、項目 7 に「の」を入れている点である。文中の名詞も「タイ」で、「国名＝場所＝範囲」という関連付けが容易のように思える。確かに、「に（存在場所）」を入れた誤答も見られるが、誤答例の中では「の」が「に」よりも上回っている。これについては、恐らく「～のは～です」という文型に影響された要因が重なっている可能性も否定できない。

4.5 項目 9

「場所格」を示す「に」で、比較的誤答率が少なかった助詞である。当然ながら、助詞「を」との混同も見受けられる。誤答になった 4 割程度の学習者は、補語と述語の格関係である文法関係や意味関係の両輪的分析が依然として不得手であることを示している。

4.6 項目 10・11・12・13

項目 10 の誤答率が 57.9% で 6 割に近く、残りの 3 項目も 6 割台の誤答率で、総じてやや高めの誤答率となっている。4 項目全部正答した完答率は 1 割にも達していなく、4 項目全部誤答になった不完答数が多かった。文中の語と語の前後関係や文全体の意味内容が捉え難かったことは確かである。しかし、1 文が長いと言っても、前件・後件に二分される重文であるから、前・後に分けて考えていたと想像される。前件では項目 10 のみで、後件の 3 項目と比して若干誤答率が少なかったのは納得できよう。しかし、項目 10 で「の」の誤使用が顕著なのは、文中の項目に安易に「の」を使用する傾向の表れとも言える。項目 10 の他の誤答要因を探ると、「手伝う」「もらう」の動詞の格関係で類分され、「主語」「目的語」を標示する「が／を」の誤使用も少数ながら見られる。「と」は多分「共同行為の相手」を想起したものと思われる。何れにせよ、「～てもらふ」の接受表現の「誰が」「誰に」の部分（必須補語）が不明瞭となったのは確かである。

後件の項目 11 は、「さいごに」「さいごの」の如く、語彙として提示される事例が多いが、「の」の誤使用が極端に多い点を鑑みると、述語と離れた文中の名詞と名詞の間（副次補語）に「の」を入れる傾向が強く、過剰般化又は過剰使用（小柳 2004：119）とも推断できる。項目 12 でもその傾向は看取できるが、項目 12 の場合、誤答の類型も七つと多く、意味役割の捉え方で苦労していることが窺える。項目 13 の誤答では、「可能の対象」の定着度が低い結果となった。「対象」との関連性で「を」を入れる学習者が多かったことがこれを裏付ける形となった。

4.7 項目 14・15

どちらの項目とも「の」を入れる文であるが、項目 14 の誤答率が 3 割台で、項目 15 の誤答率も 4 割で、相対的に誤答が低いと言える。「の」を優先的に検討する傾向が助詞「の」の定着度の高さに至っていると考えられる。「～の～の～」という「の」が連続する言語形式に不自然さを覚える故か不明であるが、「文末＝述語＝動詞」と類推して、項目 15 に「を」入れている学習者が見られた。空欄の前後のみに集中して意味関係を判断したもの（野田他 2001：71）として、項目 14 に「と（並列助詞）」を入れた学習者も見られた。

4.8 項目 16

5 割を若干下回る誤答率であるが、項目 4 と同様に「感情・感覚の対象」を表す「が」の用法である。項目 4 と異なるのは、同じ「対象」でも項目 16 の場合、「に」の誤答例が多い点である。種類と用法の混同があると思われる。4.2 でも触れたが、「～は～が～です」という骨格を表す文型単位における関節部分に相当する助詞の定着度はかなり高いと推測される。

4.9 項目 17・18

両項目とも誤答率が 4 割台の低さに止まっている。「～は～に～をあげる」という授受表現の定着度の高さが予想されるようであるが、両項目に正答した完答率が不完答率より低かった事実に加えて、両項目とも誤答に至った学習者が多かった。4.6 で述べたように、「あげる」「もらう」の授受動詞（二項動詞）の格関係を示す文型における授与者・受益者には「に」を使用することの理解が不足していると思われる。助詞「の」の誤答例を除いて、項目 10・17 の誤答例に「が／は」も見られるので、「誰が」「誰に」が交錯していることが推測される。「は」は、項目 12 でも見られる点を踏まえると、「誰が」「誰を」の交錯もあると予想される。

4.10 項目 19・20・21

単文に三つの助詞を入れる形式であるが、項目 20 の 3 割程度の低い誤答率に比べて、項目 19・21 は 5 割を超える誤答率となっている。ラーマキエン物語の梗概を知っているタイ人学習者であれば、項目 19 には並列助詞の「と」が入るはずであるが、項目 20 の誤答に「と」が誤使用されている点も考慮すると、「並列」の認識はあったと判断される。これを敷衍して、意味の取り違えではあるものの、項目 14 の誤答例にも「と」が誤使用されているので、機能語としての「並列助詞」の潜在的理解はある程度有していると推測される。並列助詞は「と」で結ばれる前後の名

詞を並立的に列挙させる役割があるが、誤答例の中に他の並列助詞である「や／か」が見られないのは、定着度の低さを表していると思われる。ところで、項目 20 は「の」を入れるものであるが、項目 21 を除く助詞の「の」を入れるべき項目全ての誤答例の最多助詞が「に」になっている点は疑問を残すところである。項目 21 の誤答に「を」が多く誤使用されているのは、項目 15 と同様に「文末＝述語＝動詞」の誤認と思われる。項目 20 においても「が／を」が見られるが、これは「たたかい」の意味を動作的＝動詞的に捉えた、母語からの負の転移とも予想される。

4.11 項目 22

誤答率が 5 割を若干上回っているが、「材料」を意味役割とする格助詞の「で」である。初級の中ではそれ程頻度が高く提出されている訳ではないが、「材料」という意味の明確性と他の助詞の用法とも重複しない点で、ある程度の定着度を占めていると判断される。その一方で、述部の「できています」に注目すると、「対象＝を／が」の誤答例も見られる。「名詞＋格助詞」の前に置かれる「名詞」の概念的意味と述語との格関係を注意深く読み取る言語能力がもっと求められていると解したい。「デ格」で筆者の目を引いたのは、項目 7 と 22 が意味用法が異なるにも拘わらず、誤答率が同率であることに加えて、誤答例の第 1 位から第 3 位までの誤答類型も共通している点である。学習者間に通有されている一定の解答行動のパターンが指摘できるかもしれない。

4.12 項目 23・24

項目 23 の誤答率は 3 割台で、項目 24 の誤答率は 5 割弱である。「～に～がいます（存在文）」という典型的な基本文型であるが、両項目とも正答した完答率が 4 割に止まっている点を含めると、「存在文」の定着度が余り芳しくないように受け止められる。項目 23 の誤答例に「の」が見られるのは、やはり空欄の前後関係のみに囚われていることを窺わせる。「場所格」との関連性では、誤答例にも見られるように「で」との混同も指摘できる。項目 24 では「にいます／がいます」の交錯や「をいます」との錯綜をも惹き起こし、一種の逆行化（小柳 2004：54）とも捉えられる。項目 6・24 は状態・存在の主体を標示する「ガ格（主格）」とされるが、第 1 位から第 5 位に至る誤答類型が同じパターンを示していることに、テストの解答行動（知識の活用面）における学習者特有の助詞選択ストラテジー（蓮池 2004：115）が使用された可能性も考えられる。

5. 終わりに―「学習言誤」から「目標言語」に向けて

中間テストの助詞の出題部分における解答行動の正答・誤答の傾向が学習者の言語能力面の正用・誤用を間接的に映し出すものとは言え、言語運用・言語使用上の正用・誤用に対しては、盾の半面に過ぎないことは言を俟たない。しかしながら、助詞の誤答分析と考察からは、語と語の関係に関わる名詞面や語彙・文法の知識を含めた動詞面や文の意味理解を柱とする文型面に対する言語知識の断片性ととも、助詞の表層格（文法機能）や深層格（意味役割）の捉え方（庵 2001：64-71）に対する脆弱性が明白になったことである。誤答の原因や誘因と考えられている言語間

エラー及び言語内エラーについての追究は、言語学習における学習者の演繹的（体系的理解）且つ帰納的（言語運用）メカニズムを有する学習過程を対象とする。学習過程には、正用は然りであるが、系列・系統的な誤用や非系列・非系統的な誤用も見られよう。その意味で、学習者は、「学習言語（正用）」と「学習言誤（誤用）」の間を往復している「中間言語」に置かれているものと考えられる。殊塗同帰の過程において見られる「学習言誤」が「目標言語」に向かうべく、筆者は浅学な日本語教師の身であるが、日々の実践と研究を重ねつつ、学習者の助詞の理解と定着度を向上させられる教材作成や学習指導や教室活動を真摯に模索していきたいと考えている。

参考文献

- 浅田まり（1994）「初級日本語学習者に対する格助詞の指導法—格助詞理解の助けと誤用を防ぐために—」『小出記念日本語教育研究会 論文集』2号、pp.65-78
- 庵功雄（2001）『新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える』スリーエーネットワーク
- 石田敏子（1996）『[改訂新版] 日本語教授法』大修館書店
- 市川保子（1988）「クイズ・テストの結果と『習得状況の流れ』—文法教育への一考察—」『日本語教育』64号、pp.164-175
- 加藤重広（2006）『日本語文法 入門ハンドブック』研究社
- 久保田美子（1994）「第2言語としての日本語の縦断的習得研究—格助詞『を』『に』『で』『へ』の習得過程について—」『日本語教育』82号、pp.72-85
- 栗山昌子（2004）「日本語指導に向けての誤用分析—助詞を中心に—」『福岡女学院大学大学院人文科学研究科紀要 比較文化』創刊号、pp.37-62
- 小柳かおる（2004）『日本語教師のための新しい言語習得概論』スリーエーネットワーク
- 迫田久美子（2002）『日本語教育に生かす第二言語習得研究』アルク
- _____（2008）「学習者はなぜ間違えるのか—学習者の誤用から教え方を学ぶ—」『国際交流基金バンコク日本文化センター 日本語教育紀要』第5号、pp.1-15
- 高見澤孟監修（1997）『はじめての日本語教育 [基本用語事典]』アスク講談社
- 野田尚史・迫田久美子・渋谷勝己・小林典子（2001）『日本語学習者の文法習得』大修館書店
- 蓮池いずみ（2004）「場所を示す格助詞選択のストラテジー—韓国語母語話者と中国語母語話者の比較—」『言葉と文化』第5号、名古屋大学大学院国際言語文化研究科、pp.105-117
- 松岡弘監修（2000）『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 八木公子（1996）「初級学習者の作文にみられる日本語の助詞の正用順序:助詞別,助詞の機能別,機能グループ別に」『日本語教育論集 世界の日本語教育』第6号、国際交流基金日本語国際センター、pp.65-81